日本基督教団 高井戸教会

礼拝のしおり（2023 年 4 月号）

～主の御前に一つにされて～

三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」
（ヨハネによる福音書 21 章 17 節）

満開の桜と高井戸教会

主の聖名を讃美いたします。2023 年度の歩みが始まりました。若い方たちをはじめ、この 4 月から新たな歩みを始める方たちもおられることでしょう。新たな年度における、みなさまそれぞれの歩みの上に、主の豊かな祝福がありますように、お祈りいたします。

キリスト教会では、この時期、大きな喜びの祝いの時を過ごします。主イエス・キリストのご復活を祝うイースターです。約 2,000 年前、キリスト教会の歩みが始まることとなった。そのことに深く関わる出来事を、毎年のイースターにおいて、皆で共に覚え、喜び祝いつつ礼拝を捧げるのです。

新約聖書に収められている四つの福音書には、ご復活なさった主イエス・キリストが弟子たちや女性たちに現れてくださった出来事が、それぞれの仕方で記されています。ヨハネによる福音書が、その第 21 章で語っている出来事も、大変印象深く私たちの心に留まる出来事の一つです。

ペトロを含め、数人の弟子たちが、漁をするために湖へと行った。けれども、その夜は一匹の魚も獲れませんでした。夜が明けた頃、岸辺に立っている人が彼らに語りかけます。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」。弟子たちは、指示されたとおりに網を打ちます。すると、網を引き上げることができないほどの魚がかかった。一人の弟子が、岸辺に立っておられるのが主イエスであることに気づき、「主だ」と言ってペトロに伝えます。そこでペトロが示した反応を、ヨハネ福音書は、こう記します。「シモン・ペトロは『主だ』と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ」（7 節）。

私は、ヨハネ福音書第 21 章 7 節に記されるペトロの行動について、かつて大いなる勘違いをしていたことを思い起こします。大学生の時に教会に通うようになり、やがて洗礼を受けてキリスト者となった 20 代の頃のことです。ヨハネ福音書が第 21 章に記す、この湖での出来事は、私の心に深く触れるものとなりました。そして、その頃、第 21 章 7 節に記されるペトロの行動、つまり一人の弟子が気づいて「主だ」と言ったその言葉を耳にして、裸同然であったペトロが上着を着て湖に飛び込んだという彼の行動を、三度主イエスのことを「知らない」と言ったペトロが、主に合わせる顔がないとの思いの中でとった行動であったと、なぜだか私は思っていたのです。第 20 章において、ペトロが他の弟子たちと共に既に復活の主イエスにお会いし、「あなたがたに平和があるように」と言っていただいていることなど、その脈絡を何も考えないところで私の中に生じていた思い違いでした。ここはやはり、復活の主イエスが岸辺に姿を現されたことを知って、ペトロは岸辺に泳いで向かおうと湖に飛び込んだ。その彼の喜びを表している行動であった。そのことを理解したのは、教会の青年会において、皆で聖書を読む中でのことでした。

ただ、ペトロをはじめ、弟子たちの心の中には、きっとひとことでは言い表し難いさまざまな思いがあったことは確かだろうと思います。湖の岸辺における復活の主イエスとの朝の食事の後、主イエスからご自身への愛を問われたペトロが、三度にわたって「わたしを愛しているか」と言われて、「悲しくなった」ように、です。ペトロは、主イエスを十字架にかけたのはこの自分自身にほかならないとの思い、自らの罪を深く思わずにはおれなくさせられたと思います。しかし、だからこそ、そのような自分にも、繰り返し、ご自身への愛を問いかけてくださり、「わたしの羊を飼いなさい」と、主に仕える道を行くように語りかけてくださる主イエスの愛を、ペトロは心に刻んだ。そして、十字架に死なれた主のご復活を、感謝のうちに心から喜ぶ思いを与えられて歩んでいったペトロであったと思います。

高井戸教会牧師　七條真明

日本基督教団 高井戸教会

☆4 月 16 日～5 月 14 日の主日礼拝、その他について（お読みください）

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21	聖歌隊奉唱 (讃美歌 21)
4 月 16 日（日）	ホセア書 2 章 16～25 節 ペトロの手紙一 3 章 1～7 節 「神に望みを託して」	詩編 130 編	8, 506, 529, 27	505
4 月 23 日（日）	詩編 34 編 9～23 節 ペトロの手紙一 3 章 8～12 節 「祝福を受け継ぐために」	詩編 36 編	4, 464, 492, 28	149
4 月 30 日（日）	イザヤ書 8 章 11～15 節 ペトロの手紙一 3 章 13～16 節 「あなたの希望とは何か」	詩編 11 編	6, 531, 474, 29	458
5 月 7 日（日）	詩編 139 編 1～10 節 ペトロの手紙一 3 章 17～22 節 「神のもとへ導くために」	詩編 3 編	3, 463, 81, 26	356
5 月 14 日（日）	エレミヤ書 30 章 12～17 節 ペトロの手紙一 4 章 1～6 節 「新しく生きる心構え」	詩編 51 編	12, 58, 521, 27	475

4 月 16 日以降の高井戸教会の主日礼拝等について、以下にご案内いたします。ただし、感染状況に大きな変化がある場合には、以下の記載とは変わってくる可能性もあります。その点をご了承ください。なお、変更する場合は、高井戸教会の週報やホームページでお伝えするようにいたします。

◎主日礼拝について

主日の礼拝については現在、1 回の礼拝(午前 10 時 30 分開始)に戻っています。どうぞ開始時間について、お間違えのないようご出席ください。

なお、手指の消毒、ディスタンスをとっての着席、マスクの着用等の感染対策は続けていますが、感染に不安のある方、体調の優れない方は無理をなさらず、ご自宅で礼拝をお捧げください。

毎月第 1 日曜日の礼拝においては、聖餐式を行います(安全を期して、市販の聖餐用の個包装のウエハースとぶどう液を用います)。

毎主日の礼拝のライブ配信（礼拝の生中継）も続けて行っていますので、ご自宅において動画を視聴しながら礼拝を捧げることができます。ライブ配信を視聴したい方は、高井戸教会までご連絡ください（TEL 03-3333-2465)。

また、礼拝説教の動画のアップロード、『礼拝のしおり』の発行も続けています。どうぞご利用ください。

◎子どもの教会について

幼小科は、毎日曜日午前 9 時から行っています。礼拝堂で礼拝を捧げ、9 時 20 分より分級を行います。幼小科の分級は礼拝後、1 階大集会室において、また同じ時間帯に父母分級が 1 階小集会室において行われます。

中高科は、毎日曜日午前 9 時 30 分より、2 階会議室において行っています。

◎オンライン祈祷会について

Zoom というアプリを用いてのオンライン祈祷会を、毎月 1 回（第 1 日曜日の午後 5 時より）行っています。

◎その他

求道者会、壮年会例会、バイブル・クラス等、さまざまな集会が少しずつ再開されています。どうぞご参加ください。

日本基督教団 高井戸教会

3月の礼拝説教から（＊3月26日の礼拝説教の要約）

「キリストの足跡に続くように」（ペトロの手紙一2章18～21節）**牧師 七條真明**

キリスト教会の歩みが始まった頃、教会の歩みを中心になって担った使徒の一人であるペトロは、当時の社会において「召し使い」として生きていた人々に、このような勧めの言葉を語ります。「召し使いたち、心からおそれ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい」（18節）。

ローマ帝国が支配していた当時の地中海世界の中で、いわゆる「奴隷」であった人々が多くおりました。たとえば、戦争が起こって、そこで捕虜になる人々がいる。そういった人たちは、戦争で勝利した国において奴隷として売り買いされたりすることがあったのです。もともと自分の国においては、かなり社会的に身分の高い人であったり、教養ある知識人であったりした人が、今は奴隷となっている。そのような人たちも多くいたようです。そのような奴隷として生きていた人々の中で、ここで「召し使い」と呼ばれているのは、家に属する奴隷のこと、一つの家の主人の所有となっていた奴隷のことです。

そのような時代状況の中で、キリスト教会にも、社会的な身分としては奴隷であった人たちがいたようです。もともとキリスト者であって今は奴隷の身分になっているという人も、あるいは奴隷の身分になったところで福音に触れてキリスト者になった人もいたと思います。そしてまた、同じ教会の中に、一つの家の主人とその主人に仕える奴隷が、共にその教会のメンバーとして歩んでいるということもあったようです。

現代の日本に生きる私たちの感覚から言えば、およそ理不尽なこと、不条理なことがいろいろとあった時代でした。それだけに、私たち現代に生きる者たちが、今現在の世界における多くの人々にとって当然であるところをもって、その時代のありようを簡単に裁くことはできません。しかし、おそらく当時、奴隷の身分にあった人々の中にも、なぜ自分たちがこのようなところに生きなければならないのか、そう思う人々が少なからずいたことでしょう。特に、もともとは社会的に高い身分や地位にいた人たちであれば、なおさらそうであったのではないでしょうか。当時のキリスト教会の中にいた、社会的には奴隷の身分である人たちの中にも、そのような思いを抱いていた人たちがいたのであろうと思います。

使徒ペトロは、そのようなキリスト者たちに、この手紙を通して、勧めるのです。「召し使いたち、心からおそれ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい」。心からおそれ敬って主人に従うこと、主人に服従することが勧められます。そして、主人が善良で寛大な主人であり、いい人だから従おう、というのではなく、無慈悲な主人であったとしても従いなさい、と勧められます。一つの言い方をすれば、自分が今置かれている場所で、なすべきことをする。主人に仕える奴隷であるのだから、主人がどのような人であるかによらず、自分の主人に仕える僕としての務めを全うする。そのことが勧めとして語られるのです。

どうしてこのような勧めを語るのだろうか。ペトロは、その理由、根拠となるところを次第に明らかにするようにして語ります。「不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです」（19節）。聖書において、このように生きなさいと私たちに命じる勧めは、人間同士の間のことを見ているだけでは分かりません。主人と奴隷の関係、それだけを見ていては分からない。なんて理不尽で、不条理なのか。こんなところでやっていられるかと思うような状況の中にある今は、神さまが自分と関わってなどおられないというのではなくて、神さまがこのような状況の中でも自分と関わっておられる。神さまとの関わりの中で、今この時も生きている。そのことを知るところで初めて、ここで語られている勧めも分かってきます。苦しみを抱えている自分が、神さまの御前にある。神さまの眼差しの中に変わらずにあって生きている。そこから耐え忍ぶ力を得る。耐えるということが生まれてくる。忍耐ということは、深く信仰に関わるものなのだと改めて思います。そして、それは神の御心に適うことなのです。

そして、ペトロは、さらに深く信仰の内容に関わることを語るところへと至ります。「キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです」（21節）。主イエス・キリストが、私たちの罪を背負ってくださり、苦難を堪え忍び、十字架への道を歩み抜いてくださった。ペトロは、主イエス・キリストご自身が、どこまでも神の御心に従って苦しみを耐え忍ばれたお姿を示します。この世に生きるところで、理不尽だと思えること、不条理だと思えること、納得がいかないと思うこと、それらを避けて生きることはできません。しかし、そこで何を思い、何を信じ、どのように生きるのか。キリストの御足の跡に続く者として歩んでいく。自分が置かれた場所で、与えられた人生を、神の御心に従って生きる。そこに、神さまから召された私たちの人生があります。